

# 言葉との邂逅

李陵・山月記 中島敦著

自ら恃むところ頗る厚く、  
賤吏に甘んずるを潔しとしなかった

文章の力とは、何か。  
文筆の道を歩んで十五年。  
そのことを問い続けてきた。  
もとより、文章の力とは、ただ  
一つの力ではない。

主題の選定、導入の掴み、論旨  
の展開、比喩の妙味、修辞の香  
り。結語の余韻。そうした様々  
なものの総合的な力が、文章の  
力と呼ぶべきものであろう。  
しかし、もし、文章に力を与え  
る最も大切なものを挙げよと問  
われれば、ただ一つの答えが心  
に浮かぶ。

文章の響き。  
それが、最も大切であろう。  
そのことを教えられたのは、  
実は、高校時代。

国語の教科書に載っていた一  
つの文章に、心を奪われた。  
「隴西の李徴は博学才穎、天

宝の末年、若くして名を虎榜に  
連ね、ついで江南尉に補せられ  
たが、性、狷介、自ら恃むこと  
頗る厚く、賤吏に甘んずるを  
潔しとしなかった。」

朗々たる響きをもって始まる  
短編は『山月記』。その名文の  
書き手が中島敦であることを知  
り、すぐに短編集『李陵・山月  
記』を買い求め、暗唱するほど  
に読んだことを思い出す。

爾来、文章とは、その音として  
の響きが命であるとの念を抱き、  
多くの書を読み、文章を書いて  
きた。

いま、若き日の日記を読み返す  
と、なぜか、すべてが、散文詩  
の形式で書かれている。それは、  
叙情としての詩に惹かれたので  
はなかった。詩という形式が、  
文章の響きを生み出すのに最適

と感じたからであろう。

さらに、学生時代、多くの聴衆  
の前で語ることを幾度も経験し  
た。無数の言葉を語り続けるう  
ちに、いつか、言葉を発すれば、  
無意識に、あるリズムを伴って  
語る術を身につけていた。

そして、その歩みの中で、我  
が国で語られてきた一つの言葉の  
意味を理解するようになった。

「言葉」  
なぜ、我々の語る言葉に、とき  
に「霊」とでも呼ぶべき不思  
議な力が宿るのか。

その一つの秘密が、言葉の響き  
に他ならない。

言葉の力が失われた現代。世の  
中には、言葉とは単に意味を運  
ぶ記号であるとの誤解が溢れて  
いる。しかし、言葉は、意味だ  
けでなく、響きをも運ぶ。そし



て、言葉の意味は、我々の脳に、  
理性に、表層意識に伝わって  
くるが、言葉の響きは、我々の心  
に、感性に、深層意識に、深く  
働きかけてくる。

その言葉の働きこそが、言葉  
を生み出す力であろう。

では、なぜ、言葉が、ときに、  
世界をも動かす力を持つのか。  
その秘密を、かつて空海が、声  
字実相義において語っている。

五大に、みな響きあり。  
然り。世界の全ては、深く響  
き合い、常に変化しているが故に。



田坂広志  
多摩大学教授 ソフィアバンク代表

BOOK